

# 潔く廃校する勇気を

かつて日本企業はニューヨークの高層ビルを丸ごと買い、日本人の群はパリでブランド品を買  
あさり、欧米人から「札幌を切る猿」と蔑まれた。今中国と同じことをしている。「爆買い」や  
北海道の広大な土地購入に続き、大学を手に入れ、要所に中国人材をはめ込んで行くつもりだ。

## 過疎地の学校は廃校になるが

小学校を社員の合宿研修に使っ  
たことがある。校舎も校庭も自由  
に使っていいと言う。まわりに住  
宅がなく大声を出しても歌を歌っ  
ても苦情は来ない。

椅子と机は大人には小さくて使  
えない。座卓と座布団を運び込み、  
寝具はリース、食事は宅配弁当を  
頼んだ。これで三日間の研修は滞  
りなく行うことができた。手間暇  
はかかったが、一般の研修施設で  
あれば一人一日安い所で一万円  
以上かかるが、この場合は経費込  
みで一日五千円程度で済んだ。

三十年前の話だが、今も学校の  
古びた静かなたたずまいを鮮明に  
思い出すことができる。十年前に  
小豆島の「二十四の瞳」の小学校  
を見学した時、「あの研修をした  
学校と同じ雰囲気だな」と思った。  
小学校が幽霊屋敷になっていな  
かったのは廃校になってまだ日が  
浅かったからだろう。教室は使い  
道がなかった。建物を取り壊して  
サラ地にしても山間の僻地なので  
買い手がいない。それで私たちのよ  
うな民間の研修会社でも「使って  
くれればありがたい」と貸し出し  
たのだろう。町の職員は始めと終  
わりに顔を出しただけで自由に使  
わせてくれた。

北海道の土地を中国人が買いあ  
さっているというのだが、今度  
は学校を買うそうだ。苫小牧の駒  
澤大学は学生が集められず経営危  
機に陥っている。(産経新聞六月  
十九日「異聞・北の大地」)。  
京都にある日本語学校、関西語  
言学院は学生五四〇人(昨年七月)  
全員が中国人、こので日本語教育  
を受けさせ日本に大学に入れるの  
を目的とする学校である。

この関西語言学院を経営する中  
国企業の「育英館」に駒澤大学は  
一切を譲渡するという。土地や校  
舎など総資産約五十億円を無償で  
移管するらしい(無償というのは  
ウサンくさいがここでこれを詮索  
するつもりはない)。

工場にした。じゃがいもを材料に  
した菓子は札幌みやげの人気商品  
になり工場はフル稼働。働く人つ  
まり工場へ通う人が増え、近くに  
コンビニまでできた。  
こうした廃校活用の成功例は稀  
であり、過疎に悩む市町村は「う  
ちにもそんな話はないか」と羨ま  
しげである。  
人がいなければ町も村もない。  
子供がいなければ学校はいらない。  
公立の学校は赤字黒字の経営責  
任がない。児童生徒がいなくなれ  
ば先生はよそに移ってもらって学  
校は閉鎖、これでオシマイ。  
私立校はこうはいかない。生徒  
数を確保して国の補助金をもらっ  
て存続しなければならぬ。今や  
二流三流校は試験でぶるい落とす  
どころではなく、定員割れに怯え  
ながら必死に生徒集めをしている。

経営管理講座 343 染谷和巳

最近地方の優良電機部品メーカー  
で社長が交替した。高齢の創業  
社長は部品を納めている親会社に  
経営を委ねた。  
百二十名の社員に研修を何度も  
受けさせてきた教育熱心で熱烈な  
アイウィル支持者だった。  
親会社から来たサラリーマン社  
長は総務課長に「こんな思想の色  
のついたものはやめてください」と  
言いつつヤアーツを机の上に放り  
出した。課長は「研修は私を変え  
てくれたし、ヤアーツもためにな  
らぬ」と思っていますが、今後送らな  
いでください。すみません」と電  
話してきた。

持ち株の関係もあり、社長は親  
会社に経営権を譲った。私は「こ  
の会社の研修は終わりだ」と思っ  
た。案の定、担当者が新社長に換  
移に行く前にビシヤリと断られた。  
社長が交替しても先代が会長と  
して実権を持っていた場合はい  
い。社長がアイウィルの研修を受  
けていて「よかった」と評価して  
いる場合はなおいい。この会社は  
会長がいなくなってもアイウィル  
のお客様でいてくれる。  
後継者は会長に育てられれば  
社長になることができた。長年  
会長のそばで仕事をするうちに会  
長の価値観に似てきた。会長が  
企業に買ってもらうか――。

まだ五十前の私を見て六十代の  
ある社長は「どんな苦勞をしてく  
るとそんな顔になるのかね」とつ  
ぶやいた。自分だって鬼のような  
顔をしているのに、私のほうがよ  
ほどひどい顔だと言っているのだ  
がある。こうした経営者がアイウィ  
ルの初期の顧客層だった。  
十年がたちこの創業社長が引退  
すると関係が断絶する。  
先代が病氣や死亡により若い息  
子が後を継いだ場合、つなごうと  
しても門前払いをくう。自由平等  
個人主義で育った若い人はアイウ  
イルが大嫌いだ。  
また新しく大企業から社長が派  
遣された会社も同じ傾向がある。

## 中国の日本侵蝕戦を阻止する

私立でも学校は一般の民間企業  
とは違う。  
苫小牧市はただで広大な敷地を  
提供し他にも様々な金銭上の支援  
をしている。国も私大補助金を支  
給している。大学は多大な地方税  
と国税で成り立っている。よって  
大学の経営方針には市や文部科学  
省の意思が反映される。中小企業  
の経営者のように独断で判断決定  
することができない。  
大学がなくなつて一番困るのは  
苫小牧市である。町が活気をなく  
す、消費が冷え込む。人口が減る。  
大学の存亡は町の存亡に直結する。

「よし」として実行してきたこと  
をそのまま引きつづき気持ち強く  
なつてくる。  
こうした有り難い会社もあるが  
数は少ない。社長交替によって離  
れていく会社が圧倒的に多い。  
アイウィルの売上げの九〇%は  
リピートオーダーによるものであ  
る。次々と社員を派遣し、出す人  
がいなくなつたら、毎年新入社員  
研修だけ出すといった会社がたく  
さんある。したがって一社消える  
と売上げの落ち込みが大きい。ユ  
ーザーの会社の「社長交替」は当  
社の生死に関わっている。  
社会の支持を失った会社は死ぬ  
しかない。死にたくないから新製  
品開発と新規開拓に懸命になる。  
幸い自由平等個人主義とゆとり  
教育で育った甘ちゃん社長と違う  
後継社長や創業社長が続々と現れ  
てきている。アイウィルは新しい  
この客層に支えられて生き続けら  
れるだろう。  
中国企業への日本の大学の身売  
りのニュースを知って、「会社存立  
の意義と目的」について考えた。  
自社もこの大学と同様の苦境に  
立たされたいとは限らない。社員  
の生活を守らなければならぬ。社  
員どうする？ やはり金持ちの中国  
企業に買ってもらうか――。